Title: 教団新報4827最終.eca Page:1 Date: 2015/09/08 Tue 11:01:15

教団新報

定 価 1部144円（本体133円〒共206円）
予約購読料 1年分 〒共 5,150円
紙代のみ 3,600円
振替 00140—9—145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
一時移転先 169-0072 東京都新宿区大久保1-7-18
電話 03(3202)0546、FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 長崎哲夫
編集主筆 渡邊義彦
印刷所 株式会社きかんし

SMJ中高生ディスカバリーキャンプ

震災被災地、宮城・福島の中高生が参加

この度、米国日本人特別牧会（SMJ）の支援により、東日本大震災被災地の宮城から8名の中高生、福島から2名の中学生が7月19～31日までニューヨーク近郊で行われたディスカバリーキャンプに参加する機会を得た。

SMJ主催による米国在住日本人の子供たちのキャンプで32回目の開催となる今年は、キャンパーとリーダー計35名が一つ屋根の下2週間を共に過ごした。毎朝のラジオ体操、礼拝、聖書の学び、アート作品の作成、スポーツ、海水浴、グループ対抗の騎馬戦等、盛り沢山の活動に11～16歳までの子供たちが協力しながら取り組んだ。

押し寄せる津波から自宅の屋根で一命を取り留めた1人は、震災後、海を見るのは今回が初めてだった。毎日泳ぎ、海釣りでは鯛を23匹も釣り上げた時は満面の笑みだった。

キャンプ場の全てのキャンパーが集うタレントショーでは、津波と福島の原発事故後の体験を2名の参加者が証しをする機会が与えられた。現地の幼い子供たちも静かに2人の話に聞き入っていた。震災後、世界中から頂いた支援に対する感謝の気持ちを伝えたいという思いが届けられた。

このキャンプは様々な違いを超え個性を発見し絆を深めた2週間となった。

以下、参加者の感想を引用する。"中でも一番の思い出はグループ対抗のオリエンテーリングやタレントショーのような誰かと協力して活動したものです。国籍、性別など関係無く一つのゴールを目指し協力していくことが私には嬉しく思えました"、「キャンプでは、毎日海で泳ぎ、ロッククライミングや海釣りにも挑戦しました。今までの私なら、（どう見られているかな？出来なかったらどうしよう）などと思い、怖気づいて遠くで見ていたと思います。現地の子の大らかで何事にも挑戦する姿に憧れを抱き、私も小さいことで悩まずに、目の前にある様々なことにどんどん挑戦したいと思いました。また、キャンプで日本に興味を持ち、これから日本語の勉強を頑張ると話してくれた子もいました。私たちだけが現地の子から様々な学びを貰うだけでなく、相手に与えることも出来たということがとても嬉しかったです。キャンプで出会い、2週間を共に過ごしたみんなとは、一生の友達になれました」。

キャンプ後、アメリカ人家庭に世話になりニューヨーク観光も満喫した。日曜礼拝では直接、震災の様子を伝え被災地への祈りを頂くことが出来た。

帰国前日、日米合同教会やSMJの人たちが歓送会を開いてくれて、被災地を思い祈りながらこのような機会を実現してくれた方々の心に触れ、参加者一同感謝の思いで一杯となった。

最後に、この素晴らしい出会いを与えて下さった主に感謝し、SMJ、日米合同教会、日本基督教団救援対策本部、宣教協力学校協議会の方々の支援に心より御礼を申し上げる。

（垣内知恵子報／宮城学院中学校教諭）

ロングアイランド・シェルター島のキャンプ場にて

《参加者の感想》

宮城学院高等学校 浅野 結愛

「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです」（一コリント12・26）。

この聖句は今回のディスカバリーキャンプのテーマの聖句の一部です。プログラムが進んでいくにつれ、私はこの聖句をしみじみ実感させられました。

キャンプ当日、日本とアメリカの文化の違いに驚きつつも、自分の英語がどれほど通用するのだろうか、どんな人たちが参加するのだろうか、キャンプ場はどんなところなのだろうかという期待を胸にバスに乗り込みました。

しかし、いざ乗ってみると、バスの後ろで、すごい速さで英語が飛び交っており、2週間過ごせるのだろうかと不安に思っていました。そんな時、ルームメイトが日本語で話しかけてくれて、そこから徐々に様々なプログラムを共にこなしていくにつれて、最初に抱いていた不安は全くなくなり、キャンパーという関係以上のものが芽生えたように感じました。

キャンプ中の礼拝の説教にこのような話がありました。皆それぞれの長い人生の道の中で、このたった2週間という短い間だけでも神様が道を交わらせてくださったのだ。私も心からそう思いました。

キャンプの後のホームステイでは心の温かさに触れることが出来ました。中でも一番うれしかったのは、「ここはあなたの家で、私たちは家族です」、そして「また絶対アメリカに来てこの家に来るんだよ」と言ってくださったことです。私は感謝を伝えるために来たのですが、それ以上の愛や優しさを貰いました。

今回私たちのキャンプに携わってくださった方、学校の先生方、そして家族に感謝したいと思います。

I Love Taiwan Mission 2015

18カ国90名の海外青年が台湾青年と共に

「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」（ロマ12・12）。

台湾基督長老教会が主催する「I Love Taiwan」は2002年から始まり、今年で第13回を迎えた。7月1日から7月18日まで「恵みのしるしを見よ」のテーマで行われ、18カ国から90名の海外青年、89名（スタッフも含む）の台湾青年が参加した。教団からは台湾協約委員会を通して2名の参加者が与えられた。

初め3日は台湾とPCTを海外青年に知ってもらうプログラムや、牧師による神学基礎講座を含むオリエンテーションと各個教会・機関への派遣礼拝が行われる。後の10日間は各個教会や機関へ派遣され、夏の日曜学校キャンプの手伝いや教会の奉仕に携わる。そして最後3日は、派遣先での活動報告と海外青年によるカルチャーナイト等が行われ、最後に閉会礼拝をもって各国へ解散・派遣となる。

台湾での18日間と出会いは本当に祝福された時だった。ILTに集められた各国の青年は彼ら彼女らのスタイルで神様と向き合っていた。思いっきり騒ぎ、思いっきり讃美し、その時そのときを友と共に生きていた。それぞれが異なる政治的状況にあり、受けてきた教育も違う。そんな若者たちの集りは驚きと学び、そして励ましの連続であった。

ILT18日間中10日間は台湾各地のローカルチャーチへと派遣されたが、私が他7人の兄弟・姉妹らと共に派遣された長光教会での日々は希望と苦難が混在した10日間であった。私たち8人の関係は良かったものの、当初は共に派遣されたメンバーであるという恵みを十分には共感できていなかった。教会近くの畑の整備のあと、私は泣いた。ワークに参加しないメンバーの姿を見ているうちに、私たち8人が長光教会に派遣された意味がわからなくなり、私たちの間に神様の存在を確信できず、そんな現状、そんな自分がとても悲しかったからである。けれど、礼拝堂で十字架に向かい祈るうちに、どれだけ私が主の存在を疑ったとしても主は絶えず共にいてくださる最も愛に溢れるお方なのだということを思い知らされた。主ははじめから私たちと共にいて、その時そのときに最も必要なもの、時、出会いを惜しまず与えて下さるのである。これはシェアリングの際にそれぞれの口から証しとして語られていた。主は私たち一人ひとりをリードし、かつ信頼をもって各国に送り出して下さっているのではないだろうか。そして、帰路の飛行機から日本の大地をみて、〝あぁ、ここが私の遣わされた地なのだ〟と感じた。いままでは〝きっとそうなのだろう〟という感覚でこの事柄を捉えていたが、いまはこのことをリアルに感じ、ワクワクしている自分がいる。

与えられている環境に感謝しつつ、絶えず祈り、主がこの地に与えてくださっている生命と向き合っていこう。多くの祈り、サポート、そして主に感謝して。

（八束春香報／関西学院教会員）

「恵みのしるしを見よ」をテーマに青年が集う

荒野の声

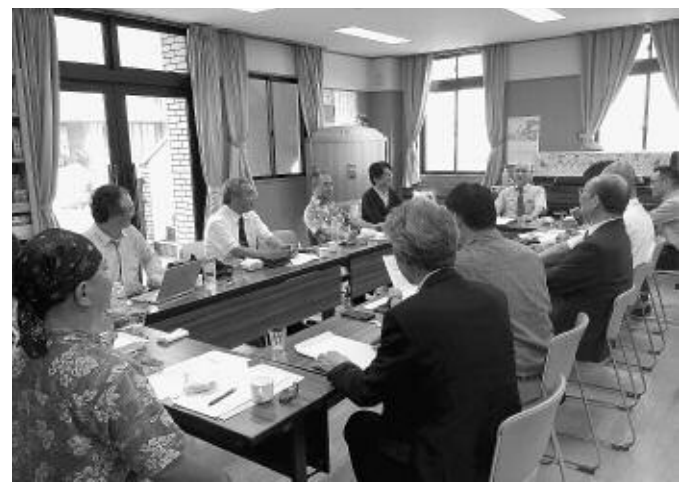
夏休み、静かだった園舎に子供たちが戻って来て、また賑やかになる。夏休みの間、教師たちも秋に向けて力を蓄える研修に、休養に時間を使った。しかし、顔が見えない子供たちのことを祈るのは変わらない。たくさんの経験を積んで、ひと回り大きくなった子供たちとの再会が楽しみだ。▼幼稚園を卒園していった子供たちの中には、小学生、中学、高校、大学生になっても教会の礼拝に出席し続けている子たちがいる。長い年月、顔を会わせて覚え祈ることができることは、教会とひとつとなった幼稚園のよいところかもしれない。▼一方、しばらく顔を合わせていない信徒も少なくない。高齢のため、家族の介護、病気や社会的に過重な責任のため主日の礼拝から遠のいてしまっている。顔を合わせて御言葉に共に聞き祈る必要を思う。▼夏休み前には、主日礼拝で韓国の牧師に説教奉仕をしてもらった。説教は韓国語。在韓国の日本人宣教師が逐語で通訳してくれた。改めて新鮮な思いで御言葉を聞いた。このような時期、顔を合わせて会い見える交流が大切と実感した。▼命を与えてまでわたしたちを愛してくださり、わたしたちにも愛することを教えてくださったお方と、顔と顔を合わせてお会いする時を心待ちにしながら日々の小さな務めになお励みたい。

Title: 教団新報4827最終.eca Page:2 Date: 2015/09/08 Tue 11:01:19

▼宣教委員会▲

16年3月開催、宣教方策会議について検討

7月6日～7日、和歌山教会を会場に、第2回宣教委員会が開催された。今回より、全国教会婦人会連合代表の長島恵子委員が陪席者として委員会に出席することとなった。


和歌山教会に集い

議事として、伝道、教育、社会の各常設専門委員会、および自主活動団体の全国教会婦人会連合、全国教会幼稚園連絡会、日本キリスト教保育所同盟、また「障がい」を考える小委員会、その他の報告を受けた。

協議事項の中心は、来年3月に計画される宣教方策会議をめぐってである。

第1回の委員会で「日本基督教団は伝道をどう進めていくか」という大まかな方向性は定められていた。これを受け、委員長より「これまでの宣教方策会議が主題として扱ってきたことを振り返ると、教団がどう伝道を進めていくかということをこれまでも模索していたことがよくわかる。それはまたどういう教会の形にしていくかということと一つである」との見解が語られ、それに応ずる形で、地方伝道の課題、幼稚園・保育園付帯施設の位置づけ、各地域間の違い、改訂宣教基礎理論・伝道資金の扱いなど様々な意見が出された。宣教方策会議の主題、および詳細なプログラムの確定までには至らなかったが、2016年3月7～8日の日程で、竜土見町教会を会場に開催することが確認された。

今回の委員会で扱ったもう一つの重要な事項は、「キリスト教学校祈りの日」制定に関する件である。第38総会期、教団議長より教団としてキリスト教学校を祈り覚える日ができないだろうかと宣教委員会に諮問があった。これを受けて、第39総会期の宣教委員会でも取り扱うこととした。今回、常議員会に提案できるよう議案および提案理由を整える作業を行った。委員会としては「キリスト教学校」のなかに幼稚園、保育園も含まれることを確認し提案理由のうちに盛り込むこととした。

その他、これも前総会期からの課題であった「牧会者とその家族のための相談室」設置について協議がなされ、今総会期中に具体化することが確認された。

（清藤　淳報）

日韓連合異端似而非対策セミナー報告

日韓共同で統一協会問題に取り組み

6月25日～26日、済州中文教会（韓国・西帰浦市）を会場に、「日韓連合異端似而非対策セミナー」が開催された。統一協会問題への共同の取り組みを目指すために始まったこのセミナーは、今年で13回目となる。日本からは15名が参加、全体で50名以上の集会となった。

開会礼拝をささげた後、まず韓国から、チェ・ユンベ教授（長老会神学大学）が、「改革神学の観点から見た新使徒運動と霊性」と題して講演を行った。韓国の教会で、新使徒運動が大きな問題となっており、その問題点が指摘された。

講演によると、この運動は使徒職、預言者職の回復を目指す運動だが、その中での言動が聖書と同等の、もしくはそれ以上の権威を持っているとする。韓国では異端とされているが、その熱心な活動ぶりを評価する声が教会内からもあるという。

日本からは、藤枝宗浩宣教師（基督教大韓メソジスト会）より「新天地イエス教証しの幕屋聖殿による日本の被害状況」と題して、日本での新天地の布教状況と被害状況が報告された。

新天地は1984年にイ・マンヒによって創設された黙示録解説を中心とした教義のグループである。「乗っ取り型」と呼ばれ、既成の教会に信者を送り込み、数年をかけて信頼を得た後、牧師や役員を追い出して新天地の教会にしてしまう。韓国では現在、信者数が15万人を超えるという。

日本では1994年秋に宣教活動を始めているが、新天地への警告がなされ始めたのは2010年前後からであり、統一協会と違って裁判の争点となるような社会問題になっていないこともあって、認知度が低い。しかし200名を超える「収穫の働き人」が活動していると言われ、実際に各教団、各教会への侵入が繰り返されている。

聖書勉強会や無牧の教会への牧師招聘、偽装教会へ呼び込むといった例も明らかになっている。

最後に日本より韓国の教会へ統一協会問題への理解、協力を求めた。特に、合同結婚式を経て韓国へ渡り、経済的、精神的に被害を負う日本人妻へのサポートの重要性を訴えた。

（与那城初穂報）

韓国・済州中文教会を会場として

◆教団教誨師会研修会・教区代表者会◆

「子どもに寄り添う」をテーマに講演、発題

6月29日～30日にかけて、教団教誨師会研修会・教区代表者会が国立オリンピック記念青少年総合センターにて行われた。教誨師96名中33名の出席に加え教団伝道委員会より2名の出席を得た。

プログラムは川合望運営委員（金沢八景）の司式・説教による開会礼拝で始まり、教区代表者会と続いた。教誨師として初めての者からベテランまで、活発な意見交換ができた。また、教区によって教誨師に対する支援は決して一様ではないことが分かった。

研修会の主題講演は「子どもたちに寄り添う～いじめ・虐待・少年非行～」と題して、弁護士の坪井節子氏（弓町本郷）にしてもらった。カリヨン子どもセンターを立ち上げ、現在理事長として子どもたちの問題に関わっている坪井氏が、いじめや虐待で苦しむ子どもたちとどのように出会い支援をしてきたか、また、苦しむ者と共におられるキリストを発見してきたか、について感銘深く聞いた。子どもの権利条約に基づき子どもを尊重し認めていくことが、必要だと感じさせられた。

▼救援対策本部会議▲

「救援活動記録刊行委員会」設置を決定

6月19日に教団救援対策本部第6回（通算第40回）会議を日本福音ルーテル東京教会にて、8月18日に第7回（同第41回）会議を教団会議室にて開催した。

募金報告として、7月末現在で、全国募金（本年3月末で終了した国内募金）が10億1525万7496円（募金終了後の献金額は997万5822円）、海外からの献金は3億9440万8453円（同815万3928円）となっていることが報告された。

救援対策室からは、宮古教会への支援・貸付執行、本部委員によるエマオ仙台・石巻問安および台湾からのボランティアワーカーの歓迎会出席、アメリカで開催されたディスカバリーキャンプ2015報告、こひつじキャンプ開催計画等を扱ったことが報告された。

奥羽教区からは、宮古教会礼拝堂新築工事進捗状況、一関教会礼拝堂修復工事完了、江刺教会礼拝堂建築計画等の報告がなされた。

東北教区からは、東北教区被災者支援センターエマオ、放射能問題支援対策室「いずみ」の活動状況の報告のほか、教団から借入をした東北教区内の被災教会の代表者による懇談会を開催したこと等の報告がなされた。

関東教区からは、宇都宮上町教会の献堂式、水戸中央教会の再建計画状況等が報告された。

また、こひつじキャンプに関わる教団と台湾基督長老教会の交流『東日本大震災救援本部ニュース』第17号発行等の報告がなされた。

審議においては、「いずみ」事務所改築費支援申請、第8回北日本三教区親子短期保養プログラム開催資金申請、水戸中央教会への支援（総工費1億620万円。支援5500万円、借入1650万円）申請等を承認した。

また、「国際青年平和会議in京都－持続可能社会の実現を目指して」（仮称）開催計画（2017年3月頃）、および、「3・11救援対策本部活動全記録刊行委員会」の発足を承認した。

その他、ハートフル釜石における活動支援等を扱った。次回会議は10月6日、教団会議室にて開催する。

（雲然俊美報）

教誨師同士の励まし、研鑽のために

Title: 教団新報4827最終.eca Page:2 Date: 2015/09/08 Tue 11:01:19

Title: 教団新報4827最終.eca Page: 3 Date: 2015/09/08 Tue 11:01:23

◆第6回夏期研修会◆ 伝道推進室主催・教師委員会後援

説教を主題に活発に意見交換

8月11日から13日にかけて、伝道推進室主催・教師委員会後援の「第6回夏期研修会（合同開催第9回Cコースの会）」が東京神学大学に会場を提供してもらい開催された。

この研修会は、教規第3条6項による者（いわゆるCコース及びその受験者）と准允後5年までの者の研修会である。その総数は300人弱いると思われるが、参加者は28名。スタッフを含め総勢45名であった。

主題は5年ぶりに「説教」を取り上げ、「説教の課題の発見と克服」と題して、東京神学大学小泉健准教授による3時間に及ぶ講演があった。

しかし、それだけではなく、説教の中心課題を見据えるために「贖罪信仰を語り伝える説教」と題して石橋秀雄教団議長に、また、「聖書の読み方」と題して同志社大学神学部石川立教授の講演を受け、参加者は説教者としての姿勢と聖書を読む工夫を学んだ。更に、具体的にヨハネ福音書をどのように読み、説教するかの課題のために「説教の源泉としてのヨハネ福音書」と題して成田いうし牧師（磐上）の講演も行われた。

牧会夜話では、加藤常昭隠退教師によって「生きた言葉、生かす言葉」と題して説教者としての自身の原体験を、また、大串眞牧師（千葉北総）によって「説教による教会形成」と題して、開拓伝道の中で御言葉によって打ち砕かれ、立ち上がらされた経験を語ってもらった。

ケース・スタディでは、よく知られている説教者の説教を、名を伏せて批評してもらった。活発な意見が交わされ、各自の説教観からの批評が集中した。このことは参加者が、日頃、自分が説教をすることの重圧から解放されるひと時となったが、説教に対するコンプレックスを抱えている現実があることをも浮き彫りにした。

朝夕の礼拝では、今回も小島誠志、大隅啓三両牧師から慰めを受けた。

講演及び礼拝は全11枚のCDに録音されており、参加できなかった方にも配付することができる（伝道推進室へ申し込み。献金1500円）。

（宮本義弘報）

小グループに分かれ、説教批評を行う

委員会コラム

信仰職制委員会

今期、式文の検討を優先

藤盛　勇紀

前期委員会からの申し送り事項の一つに、式文の扱いについて検討することがあり、これは教規に示された当委員会の職務に直接関わることなので、今期はまずこれを優先することとした。

ここで「式文」とは、『日本基督教団式文（試用版）』（「試用版Ⅰ」）と、同（試用版Ⅱ）のことで、それぞれ2006年、2009年に発行されたものである。これらは新しい式文の発行を目指して、そのために各方面からの意見を寄せてもらうことを期待して発行されたものであるが、これまで当委員会から意見を収集することはしてこなかった。今期は試用版Ⅰの発行から10年が経過することから、ここで試用版について実際に使用されている現場からの意見を求め、神学的な意見、評価をも聞かせてもらうこととした。

委員会としては、新しい式文の発行を視野には入れているが、従来の文語式文や口語式文、さらに試用版の検討ないし評価まではできるとしても、「礼拝指針」を持たないままでその先の作業にどう進むことができるのか、なお課題は多いと考えている。

また、教憲教規諸規則について、問題点の指摘を受けることがある。改正の提案は当委員会の任務ではないと考えるが、委員会として問題点の整理はしておきたい。コンメンタールの作成を視野に入れた教憲教規の学びの継続ということも前期からの申し送り事項であったので、こちらも欲ばらずに可能な限り継続しようと思う。

（信仰職制委員長）

消息

中島康三氏（隠退教師）

15年7月9日逝去、93歳。愛知県生まれ。89年受允、91年受按。89年より八千代台教会を牧会し、99年に隠退。遺族は娘・山本麻奈さん。

藤原　亮氏（隠退教師）

15年7月28日逝去、91歳。東京都生まれ。51年受允、54年受按。51年より鎌倉雪ノ下、小田原十字町教会を経て、95年に隠退。遺族は娘・高桑厚子さん。

和田信子氏（隠退教師）

15年8月11日逝去、84歳。東京都生まれ。62年受允、69年受按。63年より西片町、日立南教会を経て、07年に隠退。遺族は姪・栃下真理さん。

神の家族「にじのいえ信愛荘」

－支援の輪が広がることを願って－

「にじのいえ信愛荘」は日本基督教団の隠退教職ホームです。1959年、東京教区によって設立された「信愛荘」と、1973年、全国教会婦人会連合によって館山市に設立された「にじのいえ」が合併して5年が経ちました。

ホームは、美しい自然に囲まれた青梅市の郊外にあります。主からの召命に従い、生涯を宣教に捧げられた牧師とその配偶者が、隠退後の生活を平安のうちに過ごすことができるよう備えられました。

◇

ホームは27名が入居でき、常時20数名の方が生活しておられます。平均年齢は84歳、最高齢は93歳です。最高齢のこの方は今年で28年を過ごしておられますが、あの日、静かに語られました。「東日本大震災の時、最終任地の東北の教会で洗礼を授けた姉妹が津波で流され、天に召された」と…厳しい状況の中で伝道牧会に励まれた牧者の老後が、主からの慰めと憩いに満ちたものであるよう心から願います。

◇

荘での一日は、朝食前に食堂で持たれる礼拝ではじまります。日曜日には、礼拝堂で主日礼拝が守られ、説教は在荘の教職と外部からの教職が担当します。

「ここは皆、神の家族です」とよくおっしゃいます。年齢を重ね、健康不安を抱える中で、スタッフの誠実なお世話を受けながら、安らかに過ごしておられます。毎月行われる誕生会は特別メニューで、お祝いの方の愛唱讃美歌を歌い、荘長からのお祝いカードなど、祝福に満ちた会となります。

◇

にじのいえ信愛荘の管理運営は、教団が委嘱した運営委員会（東京教区、西東京教区、全国教会婦人会連合、等）によってなされています。入居者を特定しているため、公的援助は受けられず、維持運営は、全国のキリスト者、教会、学校、団体等からの献金によって支えられています。

この度、献金用の袋を用意しました。どうぞご利用くださいまして、尚一層、ご支援の輪を広げていただけますよう、心よりお願い申し上げます。

（飯澤弘子報／「にじのいえ信愛荘」運営委員）

入荘者が一堂に会しての食事

事務局報

教師異動

聖光学院高校　就（教）新井　秀
宮城学院中学高校　就（教）大久保直樹
〃　辞（教）酒井　薫
白河　辞（担）山口政隆
東駒形　就（主）酒井　薫
二宮　就（主）山口政隆
酪農学園大学　就（教）高橋優子
本宮　辞（代）佐藤　健
〃　辞（担）安井　潤
〃　就（主）安井　潤
米子　就（担）野々川藍
日野　就（兼主）野々川藍
西伯法勝寺　辞（代）森　浩
〃　就（代）野々川藍
洞爺湖　就（代）石川宣道
相模原南　辞（代）一宮秀禎
〃　就（主）一宮秀禎
聖学院中学高校　就（教）百武真由美
西那須野　辞（代）秋山　徹
〃　就（主）潘　炯旭
甲陽園　辞（担）洪　伊杓
〃　就（担）洪　珉基
丹後宮津　就（主）洪　伊杓
紅葉坂　辞（担）川上咲野
原宿　就（担）川上咲野
大竹　辞（代）川原浩藏
〃　就（代）海老原佳奈子
東北学院大学　就（教）吉田　新
伊予小松　辞（主）山田茂美
〃　就（代）上島一高
千歳　辞（主）湯谷忠興
〃　就（主）山本昭夫
境南　辞（兼担）千原　創
東京女子大学　辞（教）守屋彰夫
東北学院大学　辞（教）村上みか
同志社大学神学部　就（神）村上みか
大町　就（代）柳谷知之
井原　辞（兼主）小松茂夫
〃　就（代）阪西恵理子
高屋　辞（兼主）小松茂夫
〃　就（代）阪西恵理子
鴨方　辞（主）小松茂夫
〃　就（代）石川敬規
新見　辞（代）小松茂夫
〃　就（代）笹井健匡
角田　辞（主）及川和枝
〃　就（主）小松茂夫
阿佐ヶ谷　辞（主）大村　栄
〃　就（代）大宮　溥
西札幌　辞（代）丸山澄夫
〃　就（主）丸山澄夫
聖学院大学　辞（教）佐野正子
向日町　辞（担）大坪哲也
生駒　就（担）大坪哲也
青戸　辞（主）佐々木迪淳
羽沢　辞（主）福田　栄
〃　就（主）佐々木迪淳
なか　就（担）北口沙弥香
藤沢北　就（担）長倉　基
橋本　就（担）中西理恵
稚内　就（代）伊藤大道

教師隠退

平松　潔、湯谷忠興

教師休職

川崎達也、玉田　真

教会合併

高倉・津山福音⇩高倉

伝道所開設

久喜復活
〒346－0007　久喜市久喜北2－4－47

第一種教会建設

小金井緑町

教会名称変更

石岡記念⇩小平

教会通信先変更

井原
〒715－0000　井原市芳井町沢岡591　池田義明方
高屋
〒715－0024　井原市高屋794　岡田方

Title: 教団新報4827最終.eca Page: 4 Date: 2015/09/08 Tue 11:01:26

宣教師からの声 番外編

愛の教育者 アニー・ダウド

横山 義郎
（清和女子中高等学校前校長）

若き日のアニー・ダウド

アニー・ダウドは、1861年11月6日「ミシシッピ州ダウド」だけで郵便が届いたと言われるほどの名家に、弁護士の三女として生まれました。女学校卒業後は教会付属の学校で音楽の教師として働いていましたが、やがて外国人に神の救いを伝えたいという思いを強く持つようになりました。丁度その頃、高知に来ていた宣教師の依頼を受けた南長老派教会は、26歳のダウドを高知に赴任させました。

1887年、高知英和女学校の教師として来高したダウドは、教師のかたわら、独力で市内の婦人たちに聖書を教え、キリスト教伝道を熱心に行いました。この学校は10年足らずで廃校になりましたが、ダウドは高知に留まり、僻地伝道を始めました。

その途中で出会った恵まれない少女たちのことが忘れられず、この少女たちに教育を受けさせ、信仰を持つことが出来ないものかと祈り願うようになりました。

1901年、乳ガンの治療から帰ってきたダウドは、鷹匠（たかじょう）町の借家に2名の少女を引き取り、教育を始めました。ここに清和の前身である「高知女学会」が誕生しました。ダウド40歳でした。15、16歳になっても全く教育を受けていない貧しい家庭の少女たちを次々に引き取りました。ダウドは、生活を共にしながら勉強だけでなく生活に必要な全てのことを教えました。

高知女学会は家庭のような学校で、全員が寮で生活をしていました。毎日、朝夕に礼拝を守り、日曜日には全員が教会に出席しました。英語だけでなく音楽教育にも力を入れ、全員がピアノやオルガンを弾くことが出来ました。授業で作った刺繍の作品は、学費補助のために米国の教会で販売してもらいました。

女学会の経営は困難でしたが、生徒たちは必要な物を十分に与えられていました。ダウド自身は自らの給与を切り詰め、安い質流れ品の洋服を仕立て直し、繕った靴下を履き、穴を隠すために幾つものボタンをつけたスカートをはくなど質素な生活をしながら経営を続けていました。規模が大きくなった学校の経営は、1915年からはミッションの経営に変わりました。1924年には米国の教会の婦人たちの献金によって鷹匠町に新校舎を建てることが出来ました。

しかし、この校舎は3年後の1927年12月3日、ストーブの煙突の故障が原因で全焼してしまいました。ダウドは使い古した聖書だけを片手に生徒たちを誘導し、1人の怪我人も出しませんでした。「泣き叫ぶ女生徒。ダウド嬢の目にも涙」の見出しで、機敏な避難の様子が新聞記事に残されています。ダウド66歳の時でした。

校舎の消失にがっかりしたダウドでしたが、「泣くのは止めましょう。神様には仕方がないことはありません」と再建への祈りを始めました。廃校を考えていたミッションの支援は得られませんでしたが、卒業生とダウドの働きに共感する多くの人々の支援により、翌年には校舎を再建することが出来ました。

このようなダウドの働きに対して、高知市はダウドの表彰を決めました。当時としては異例のことでした。最初、固辞していたダウドでしたが、神の栄光のため、全力を注いで主の業に励んだ結果だと教職員に勧められ、1933年2月11日に表彰を受けました。その文面には、「冷静深厚、博愛の心に富み、宣教師として遠く本市に来任し、熱愛を持って伝道に従事せらる。傍ら、高知女学会を創設して薄幸なる女子教育に従事すること30余年。古希を過ぎても疲れることを知らず、地方教化のために力を尽くされた功績は寔（まこと）に甚大なり」と記されていました。ダウドの名前とその働きが県下に知られるようになりました。

宣教師としての定年延長をしていたダウドでしたが、高知女学会の経営がミッションから高知教会に変わり、清和女学校になったのを機に帰国の決心をしました。

1937年4月12日、76歳のダウドは帰国の途につきました。人生のほとんどを高知のために捧げ、「帰りたくありません。神様が赦して下されば高知で死にたい」と高見山に墓地まで買っていましたが、神様は高知での働きをこれまでと定められダウドを帰国させました。

1901年、一人の宣教師によって始められた小さな清和学園は、多くの困難の中でダウドの思いを大切にキリスト教主義の学校として存続しています。ダウドの名前を聞く時、私たちは信仰による小さな働きが、大きな実を結ぶことを思い出します。

ダウドは、帰国後はミシシッピ州ジャクソンにある老婦人ホームに暮らしました。目も耳も不自由になり、足も弱っていたダウドでしたが、ホーム内では、バイブルクラスを開いたり、寝たきりの婦人たちを訪問したりするなど、祈りと聖書を読むことを欠かさない生活を送り、1960年4月23日に99歳で天に召さるまで、ダウドの生涯は神様に仕えるものでした。

（Kyodan Newsletter より）

《信仰職制委員会》 アンケートのお願い

委員長 藤盛勇紀

8月下旬に、当委員会より、各教区・支区、各教会・伝道所宛に「日本基督教団式文（試用版Ⅰ・Ⅱ）」についてのアンケートをお送りいたしました。本アンケートに基づいて、「礼拝指針」作成の参考にいたします。お忙しい中とは存じますが、何卒ご協力を宜しくお願い申し上げます。

尚、同封の返信用封筒にて、11月末日までにご返信をお願いいたします。

また、新報4825・26号3面「信仰職制委員会報告」に掲載の『日本基督教団教憲教規釈義』についても、当委員会にお問い合わせください。

ご不明な点などございましたら、左記までご連絡下さい。

日本基督教団事務局
担当幹事 道家紀一
（TEL 03－3202－0541）

お詫び・訂正

新報4825・26号、1面「会館工事費用負担決定報告」7段4行目「教師養成制度検討小委員会」を「教師養成制度検討委員会」に、10行目「菅原力書記」を「菅原力委員長」に、お詫びして訂正いたします。

4面「議長談話」2段1行目の「信徒」を「会員」に、お詫びして訂正いたします。

ひとびと

矢野 肇さん

曾祖母の信仰を受け継ぎ

矢野肇さんの信仰のルーツは曾祖母の時代まで遡る。曾祖母は江戸時代生まれのクリスチャンだった。子ども時代、曾祖母が天眼鏡で聖書を読んでいた姿を憶えているそうだ。父方の祖父は熱心なクリスチャンで、伝道にかなり力を入れていたようだ。家にあった仏壇も処分されたそうだ。母方の祖父は松山番町教会からは離れたところに住んでいたが、熱心に教会に通った。

両親も松山番町教会で洗礼を受けた。父は明治生まれで、7人の兄弟姉妹の長男であり、教員であった。結婚後、日本で教員をしていたが、1938年に満州の奉天市（今の中国瀋陽市）に移住した。

矢野肇さんは、満州の奉天市で1940年に誕生した。満州のことは幼少であったため、あまり記憶がないが、終戦後、ロシア兵3人が家へ靴のままで銃を肩に入って来て、物を物色して、家中のものをひっくり返し、父と妹と肇さんは呆然として恐ろしかったこと、そのとき母は床の下に隠れ逃れていたことを憶えている。

1946年に満州から引き上げて帰った。小学生の頃、母に連れられて松山番町教会の日曜学校（教会学校）に通っていた。父が教員であったため、その影響で教員めざして愛媛大学に入学した。一般教養の時、YMCAに入会し、キリスト教について学んだ。その頃、学生運動も盛んで60年安保闘争の真っ最中。全学の学生がデモに参加したことがあった。学生のとき、松山の日本基督教団の教会をあちらこちらへ行ってみた。

教員となり、仕事の忙しさで当分お休みしていたが、結局両親が所属する松山番町教会に落ち着いた。そして1969年に松山番町教会の宇都宮充牧師より洗礼を受けた。結婚式も松山番町教会で挙げた。妻はクリスチャンではないが、理解は示してくれている。現在はこの教会で礼拝へ出席できることに感謝している。

松山番町教会員、役員、墓地委員長、バザー委員長。

理想の教会

教会が関係するキリスト教学校の中学生たちが夏休みの宿題の一つとして、牧師へのインタビューにやって来た。教会やキリスト教のことを深く知るために準備されたプログラムであろう。早朝礼拝と主日礼拝の間の短い時間に予め設定されている多くの質問に答える。「教会は何時出来たのか」「どんな活動をしているのか」「あなたは何故、牧師になったのか」、そのような質問の中に「理想の教会はどんな教会だと思っていますか」というものがあった。この問いに答えるのには少し戸惑った。何しろ日頃あまり考えたこともない事柄である。教会に対して理想の姿を描いたこともないし、教会に与えられる幻とも違うように感じたからである。教会は主のものであって、牧師や教会員の理想を描くところでもない。時折、〝教会はこうでなくてはならない〟と主張する人々もあるが、信仰の一致に基づいて多様な証しが為され、それによって主の栄光が現されるのであるから、あまり人間的な思いで牧師の教会に対する理想を語ることも出来ないように思えた。もちろん中学生の前に「教会論」を展開してみても充分な答えにはならないであろう。〝この子どもたちに神様は何を求めておられるだろう。何を喜ばれるだろうか。〟そこに教会の理想があるように思って、一つの答えだけをしておいた。

〝あなたたちがそこに居る、その教会が理想です〟と。子どもたちは神様の喜びに近づいてくれるだろうか。期待している。

（教団総会副議長 佐々木美知夫）